

我が家のゼロ・クリエーター

能美にな

「ただいま。」

家に入ってぎよつとした。あまりにもいつもの光景と違う。台所は洗い物でいっぱい。取り込んだ洗たく物もかごに入ったまま。一度は出そうと思つたもののあきらめたらしいゴミ袋もあった。一言で表すならば、家の中は荒れていた。

奥の部屋で物音がする。母がねているのだ。いつも元氣な母がめずらしく風邪をひいた。幸いコロナではなかったが相当つらいようで、昨日からずっとね込んでいる。私はゴミ袋を所定の場所に置きに行った。洗いのくらいなら宿題の前に行けるなど思いながら、まずは洗面所に行き、手を洗う：スカッ。ハンドソープ切れだ。詰め替え用はどこにあったかな。棚を開けて探す：あった。ボトルは重くて、うつすときにこぼしてしまった。うーん、このまま洗面台もきれいにしておうかな。そうこうしていたら、あつという間に時間がたってしまった。居間に戻ると、母が起きて台所に立っていた。私はゴミ出しや洗面所の掃除をしたことを自慢げに話した。それから食器洗いの手伝いをする。食洗機も使うから楽だと思っていたが、食洗機の中には洗い終わった食器が残っており、その片付けから始めることになった。なかなかやりたいことが始められない。やつとおやつを食べ終わり、ごみを捨てて宿題を：ゴミ箱に次の袋がついていない。私がいらいらし悪態をつきながら次のゴミ袋をセットしている横で、母は淡々と食器用洗ぎいの補じゅうをしていた。洗ぎいの補じゅうや次のゴミ袋の設置は、『名もなき家事』と呼ばれている。私たちが普段している『お手伝い』はこれらの名もなき家事の上になり立っていることが多い。名もなき家事は、食器洗いやゴミ出しに代表されるようないわば『名のある家事』の準備や片付けをさしていることもある。

普段のお手伝いが『プラスを作る』家事だとすれば、名もなき家事は『マイナスをゼロに戻す』家事だ。プラスの家事はほめられやすい。成果が分かりやすいからだ。それに比べてゼロを作る家事はどうだろう。まず地味だ。今回のように、マイナスの状態を目の当たりにして初めて気付かれることさえある。しかしこれが整っていないと、あの時の私のように、行動の流れが止まってしまつて、いらいらすることが多くなつてしまうのだ。

ゼロを作ることは『日常』を整えることだ。当たり前前にありすぎて見えにくくなっている生活のスタート地点を整える、それがゼロを作る家事なのだ。家事が得意ではない母も、精一杯ゼロを作ってくれていたのだ。見えるものばかりがすべてではない。見えないものに気付き、感謝できる人になりたいと思つた。

我が家のゼロ・クリエーターに感謝を。

お母さん、いつもありがとう。

評価のポイント

非日常から目の当たりにした日常、1つ1つの表現が秀逸。改めて身近な人への感謝に気付かされる。